

女性部活動と“ふのり増殖事業”

～ 資源の増殖・確保を目指して ～

戸井漁業協同組合 女性部
室 谷 久 恵

1 地域の概要

『日本で最も魅力的な都市』～函館市～

函館は北海道の南部、渡島半島の南東部に位置し、津軽海峡、太平洋、噴火湾（内浦湾）の三方を海に囲まれており、西からは対馬海流（暖流）東からは親潮（寒流）が流れ込み、それがぶつかり合い、豊富な漁場を形成し「いかの街函館」でも知られるように新鮮な海の幸や、日本一の生産量を誇る「昆布」などの水産業と、歴史的ロマンあふれる街並みや函館山からの美しい夜景が人気で、年間 500 万人の観光客が訪れる国内有数の観光都市としても有名な街である。（図 1）



図 1 戸井地区の位置

戸井地区は、函館の空の玄関口、函館空港より車で約 20 分ほど東へ行った場所に位置し、青森県大間町と津軽海峡を挟みわずか、17.5 km の距離にあり、北海道～本州最短地「汐首岬」のあるエリアで、晴天の日には下北半島の街並みが一望できるほか、美しい海岸線沿いから四季折々の植物や「幻の鉄道 旧戸井線」のアーチ橋群など、貴重な文化遺産を観ることができる。（写真 1・2）



写真 1 旧戸井線のアーチ橋

昭和 11 年着工、戦時中の 17 年に中断した
未完成の鉄道路線



写真 2 北海道～本州最短の地

晴天の日には、下北半島が望める

2 漁業の概要

戸井漁業協同組合は平成13年に戸井西部漁協と小安漁協が合併し、戸井町漁協を設立し、平成16年に東戸井漁協と合併し、平成の大合併で函館市と戸井町が合併したことを受け、平成18年に「戸井漁業協同組合」に名称を変更した。

令和2年度の組合員数は231名。古くから昆布に携わる漁家が多く、天然昆布（黒口浜・本場折）・がごめ昆布や養殖昆布などの採介藻漁業や、戸井町時代に町の魚として扱われたみずたこ、延縄漁業で水揚げされるばばかれいや一本ずつ丁寧に釣りあげ、活締め、血抜きするこだわりの天然ぶりなどの漁船漁業、なかでも、平成19年7月に商標登録を受けた「津軽海峡で漁獲され函館で水揚げされたまぐろ『戸井船団 活〆鮪』」は全国的にも有名で、毎年、豊洲の初セリには「大間の鮪」と「戸井まぐろ」で最高値を競い合っている。（写真3・4）



写真3 釜谷漁港で水揚げされた「戸井まぐろ」



写真4 厳格な船上での活〆、血抜き作業を行った鮪だけに、商標登録をうけたステッカーを貼って出荷する

令和2年度の販売取扱高は1,190トン、およそ12億円の取扱金額に留まり、近年は主要魚種である、するめいかやさけなどの回遊性魚類の来遊量の減少や天然昆布資源の枯渇、磯焼けによるうにの身入れ不良など、採介藻漁業も低迷している。

しかし、組合では、各関係者の方々と共に、数年前より「豊かな海を取り戻す」ため、漁場造成や、昆布母藻の確保など様々な取組みを行っている。

私たち女性部もその一環として、冬場の貴重な収入源となる「ふのり」の増殖をすることにした。

3 研究グループの組織と運営

戸井漁協女性部は、組合の合併と時を同じく、戸井西部漁協、小安漁協、東戸井漁協の女性部員から成り、現在は52名で活動している。

過去には、平成14年度から10年続いた前浜で獲れる新鮮な魚介類の直売イベント「お魚感謝Day」へ参加し、その時期ならではの旬の鍋物（汁物）を来場された方々に無料で配り大変喜ばれた。

（写真5）



写真5 10年続いた「お魚感謝Day」

また、函館市や北海道主催の料理教室へ講師として数名派遣するなど、行政への協力も積極的に行っている。全体の活動としては、定期的に漁連・信漁連・共済など各系統団体の協力を得ながら視察研修を開催している。（写真6・7）



写真6 函館市内の学生への地元で獲れる新鮮な魚の捌き方教室（左）や“浜のおかあさん料理教室”（右）への積極的な参加



写真7 定期的を実施する、視察研修

4 研究・実践活動取組課題選定の動機

多くの漁家では夏場の昆布漁も終わり製品化作業も終え、みずたこ漁を迎える季節がやってくる。「浜のかあさん」は、12月～3月まで冬場の貴重な収入源となる「ふのり摘み」をして家計を支えている。(自分の小遣い稼ぎ?)

北海道でも温暖な道南とはいえ、真冬の津軽海峡で手摘みによる作業は1時間経てば指先が痺れ、感覚も無くなるほど厳しい作業だ。

その様な中、平成24年に磯浜に変化が見られた。

.....「ふのりが生がっていない。」(繁茂していない).....

平成24年直近(H19～H23)の5カ年の平均では約4.5トンあった漁獲量が、3.3トンほどしかなかった。(図2)

目に見えるこの状態を女性部で話し合い、組合に相談した。すると、「ふのりの増殖」の提案を渡島地区水産技術普及指導所よりもらい、早速、翌年の平成25年度よりはじめる事とした。

ふのりに対する知識が全くない状態でのスタートであったが、指導下さる方々の協力で少しずつできる範囲で行っていく事とした。

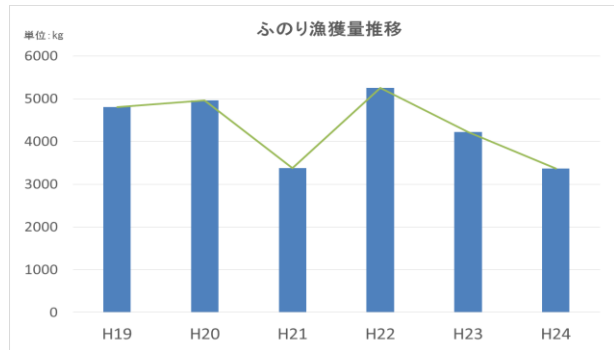


図2 平成19～平成24年度におけるふのりの漁獲量

5 研究・実践活動状況及び成果

ふのりは胞子を放出し平磯に付着し成長するため、まずは胞子が放出する時期を見極めるが、その前に平磯に付着しやすいように掃除をしなければならない。ふのり資源の確保のため、禁漁区とした平磯を重点的に掃除する。この作業は、平磯に付着したふのり以外の海藻や白化岩の原因となる石灰藻を取り除く。(写真8)



写真8 平磯掃除の様子

次に、母藻となるふのりを採取し一晩陰干しする。陰干したふのりをたまねぎ袋に詰め、海水を入れたバットの中に投入し胞子が出るまで約 1 時間程度待ち、ジョウロで磯掃除した場所を中心に散布する。(写真 9・10)



写真 9 母藻となるふのりを広げ、一晩陰干しする



写真 10 胞子散布の様子

この作業は平成 25 年より行っており、徐々にふのりの生える面積が増えている。また、令和 2 年に指導所がふのりの着生がない平石を試験的に磯に移動し、母藻の散布をしたところ、その漁期にふのりの繁茂が確認された。ふのりの着生していない平石はたくさんあるので、その平石を磯に移動し、漁場を広げることができると考えた。

そして、令和 3 年に青年部もこの活動に賛同してもらい、1 個 20 k g ~ 30 k g、重い物では 50 k g ほどある平石を 200 個程度、移動させ大掛かりな漁場を指導所の指導のもと造成することができ、今年の 6 月に胞子液の散布を行った。来春の漁期には、たくさんのふのりが採れると楽しみにしている。(写真 11・12)

なお、ふのりの着生状について毎月 1~2 回程度、指導所で観察してもらい報告を受けている。



写真 11 平石漁場造りの様子

6 波及効果

環境の変化や周期的なところもあると思われるが、ふのりの増殖事業を行った平成25年度は、5.3トンの漁獲量があり、その後の平均（H26～R2）では、組合員の減少などにより、ふのり作業に従事する人が減っているなか4.4トンの漁獲量がある。

（図3）



写真12 造成した平石漁場

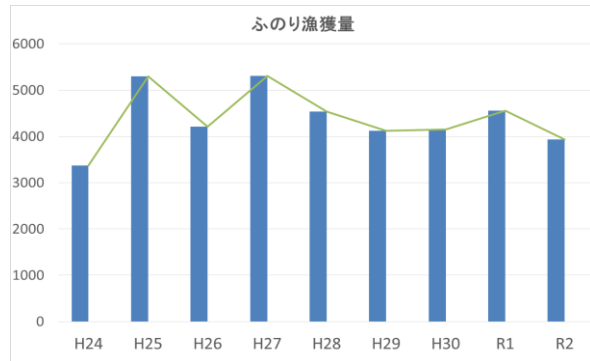


図3 平成24年～令和2年におけるふのり漁獲量推移

ふのり作業に従事する人たちの、資源の増大、確保に少しでも貢献できたのではないかと思います。

7 今後の課題や計画と問題点

現在、一部禁漁区やその周辺で行っている増殖事業を徐々に拡大し、また、近年の地球温暖化により磯場が消滅している現実をみて、今年おこなった平石漁場の経過を観たうえで、さらに増設していきたい。

海洋環境が急激に変化する昨今、今後も資源が枯渇する事の無いよう、女性部活動の一環として継続して行きたいと思っている。